

3歳児の言葉の発達に対する保育者の援助について — 3歳児の絵本の読み聞かせから —

吉澤芳枝

(川村学園女子大学大学院)

【はじめに】

私は8年間保育者として幼稚園勤務をしたなかで、特に子どもたちの言葉の獲得に興味をもつようになった。以前から言葉の獲得には、保育者と子どもの対話が重要であると考えてきた。子どもの心を落ち着かせ、そして自由に発言できる環境を保育者が作り出すと子どもたちは会話を始め、多くの言葉を獲得していくようになる。このことを日本乳幼児教育学会「幼稚園生活における幼児の言語獲得に影響を及ぼす保育環境について」で発表する機会を得た。

近年、テレビ、ビデオ、パソコンなどメディアの発達が進む中で、絵本を媒介にした子どもと保育者の信頼関係は、前者であげたようなものとは比較ができないほど大切なように思える。信頼関係が成立し、初めて相手とコミュニケーションをすることができる。正高によると「子どもは、絵本やお話で物語にさらされるうちに、言葉を音から覚え、また言語能力も発達します。そして、だんだんと物語そのものを理解するようになり、自分でもストーリー性のあるおはなしができるように吸収していきます。それが人とのコミュニケーションに役立つのです。会話の発達を促すためにも、絵本を読んであげることとはとても大切です」(0歳児からの子育て技術 正高信男 PHP)と述べている。実際、保育者と子どもの二者間のあいだに絵本を媒介にして遊んでいると今まで泣いていた子どもが安定し、保育者にいろいろと説明をしてくれたり、保育者に質問をしたり、なによりも笑顔を浮かべる子どもたちが多く出てくるようになったのである。子どもは、どんな絵本を読んでも言葉の機能を働かせる。物と名称を関係付け、それが出来ない時には子どもなりの言葉を作ることもある。更には、言葉を使いながら考えることもできるようになってくる。私はこのことから、絵本は子どもたちにとって、特に大きな効果をもたらしているように感じた。

【研究目的】

正高が述べているように、絵本の効果は子どもにとって大きな存在である。子どもと対話ができる絵本というのは、いったいどんなものがあるのだろうか。私は、その中で文章構成と絵が単純明快で更に子どもたちが最も好んでいた「いないいないばあ」を取り上げ

分析、考察をする。

【研究方法】

研究方法としては、絵本の分析を行う。実際、「いないいないばあ」に関する書物が、どれくらいあるのかいうことを調べてみると126件もあった。これは、すべて日本の書物である。あまりにもたくさんあるのでその中から4冊を選出することにした。これらは、常時3歳児クラスに備えられ、実際保育者として私が使用した絵本である。⑤、⑥に関しては子どもが興味をもちそうな絵本だが、まだ子どもに読み聞かせをしていないので、分析は差し控えることにする。

①松谷みよ子のあかちゃんの本 「いない いない ばあ」

松谷みよこ・文 瀬川康男・画 童心社 1967年4月15日初版

②くんべいあかちゃんえほん 「いないいないばあ」

ひがし くんべい(さく) 瑞雲舎 1996年5月5日発行

③「いないいないばあえほん」安野光雄 童話屋

1987年5月5日 初版

④あかちゃんのアソビえほん2 きむらゆういち

「いないいないばあ あそび」偕成社 1988年12月初版

⑤たのしいポップアップえほん かわいいどうぶつ1

「いないいないばあ」作・ポップス 画・冬野いちこ

永岡書店 2003年発行

⑥いない いない ばー (Peek-a-Boo)

なかえよしを・作 上野紀子・絵 ポプラ社 2003年初版

【分析ならびに考察】

①の絵本は、3歳児だけではなく4歳児も好んでいた絵本のひとつであった。話の内容はとても簡単なので、一見子どもたちもすぐにあきてしまいそうに見えるが、結果としてはその反対であった。子どもは、保育者のところにこの絵本をもって来ると「これよんで」と話す。友達となかなか遊べない子どもは、一日になんどもこの絵本をもって保育者のところへくることもあった。気持ちが不安定である子どもは、保育者に絵本を読んでもらうことにより気持ちが安定するのではないだろうか。また、絵本の登場人物が「いないいない」のときは顔をかくし、その後「ばあ」で笑顔の表情を表出すると、その笑顔を自分の母親の笑顔のようにイメージすることから、より安心感を抱くとい

うのも理由のひとつではないかと考えるようになった。子どもは、この「ばあ」の表情をみると必ず笑顔の表情になっていた。そのときに、無口だった子どもも絵本を媒介に「いないいないばあ」などの言葉を徐々に発するようになった。

②の絵本は、登場人物がままとわんちゃんとのんちゃんの3人である。松谷の絵本の方が、多くの登場人物が出てくるので子どもたちも前者の方をより好んでいた。しかし、共通する点は、手の中に隠れていた表情が突然現れる場面にスリルがあるのではないだろうか。泣いている子どもたちもこの場面になると笑顔を見せたり、大きな笑い声をあげることもあった。また、子どもたちは、絵本に書かれている言葉を真似しながら発すると共に動作もつけるので、それを聞いた保育者も動作をつけながら言葉を返す(いないいないばあのやりとり)。このような場面を繰り返すことで、二者とも言葉のやりとりを楽しんでいることがたびたびあった。

③の絵本は、文字がまったく書かれていない。その分、保育者が抑揚をつけながら、そして保育者のオリジナルの言葉を付け加えながら、子どもたちに絵本の読み聞かせをすることができる。子どもが保育者に絵本を読み、その時に保育者が驚く表情をすると、子どももとても喜んだ表情を浮かべることがあった。その後、子どもが言葉を発したり、子どもが保育者の役割になって絵本を読むこともあった。子どもが率先して言葉を話すということは、子どもにとっても言葉を覚える良い機会だと思う。

④の絵本は、子どもが好むような絵の描き方をしていいる。ポップアップ絵本ということもあり、作りが立体的なのでより一層子どもたちは興味をもっていた。登場人物は、ねこ、いぬ、うさぎ、りす、ことりの5場面で設定されている。しかし、人間は登場人物としていない。絵本全体が、やや年齢の低い子どもたち向きのように感じられる。それに気付く子どもは自分が保育者の役になり、友達に読み聞かせる場面もみられた。子どもたち同士で次は～が出てくるよなどと話し合っている姿もまた、子どもの言葉の機能につながるのではないと思う。なにげないところから子どもたちの会話ははずむ。そこに絵本のよさがあるのではないだろうか。言葉を教えていくのにもただ保育者が教え込むだけではなく、子どもが自然に言葉を機能できるような環境作りが大切なように思う。そして、このような環境作りができていれば子どもたちは、自ら言葉の獲得をしていくにちがいない。

【まとめ】

以上が、絵本のそれぞれの分析である。子どもたちは、これらの絵本を見つけると必ず「よんで」と保育者のところに近寄ってくる。人見知りの激しい子どもも初めはみんなの輪の隅の方にいるが、その場の雰囲気慣れると徐々に自分から言葉を発するようになってくる。絵本を媒介に子どもと保育者、子どもと子どもが言葉を交わしながら新しい言葉を機能させたり、自分が知っている言葉を相手に教えることもある。また絵本を保育者が読む空間で、こどもたちは少しずつ言葉を獲得していく。これまで、私はこどもと保育者がただ単に言葉を話す環境を作ることから子どもは言葉を機能させることが出来ると考えていたが、絵本を媒介にして話していくことの大切さに気づかされたように思う。

これら4冊の絵本を媒介にして感じた共通点は、気持ち不安な子どもたちが、この絵本「いないいないばあ」を読んでいるとだんだん表情を明るくすることであった。子どもたちが、言葉を機能させるのにまず大切なことは、気持ちを安心させること、リラックスの状態がなによりも大切ではないかということである。気持ちが安定することで初めて言葉も表出するようになる。そして、このような状態が継続される限り、言葉の表出は著しくなっていくように思える。安定した環境の中で、子どもと保育者の言葉の行き来がなければ必ずといっていいほど、言葉の発達は難しい。二者間、子どもと保育者の関係では難しいものも、絵本を媒介にすることでその環境は変貌する。安心感を土台とした言葉の獲得として「いないいないばあ」の絵本は大切なのではないだろうかと考えるようになった。

更に、保育者が絵本の指導としてなにも目的をもちずに日常生活を送るのではなく、保育者側が個々の子どもに適した絵本を用いることによって、子どもの生活空間の拡大に繋がるのではないかと想像する。そこには、子どもなりに考えることができる空間が備えられるのではないだろうか。

【今後の課題】

今回は、多くの絵本の中から種類の絵本をもとに、3歳児の言葉の発達との関連から考えた。今後は、3歳児の言葉の獲得がコミュニケーションからだけではなく、絵本、特に生活絵本のようなものからどのように導き出されているかということを広く考えていきたいと思う。